

経済発展の原動力としての宗教

～マックス・ウェーバーの視点と現代～

漆 畑 春 彦

はじめに

I. 宗教改革がもたらした職業聖化の思想

1. ルターの職業観
2. 「合理化」と職業聖化
- II. カルヴェニズムがもたらした「近代資本主義の精神」
 1. カルヴェニズム下の職業労働観
 2. カルヴァンの予定説

3. 人々の内面的孤立化と天職概念

4. カルヴァン派の宗教認識の独自性
 5. 神の利益に適う職業選択と労働
 6. 「勤勉が富を生む」新たな経済サイクル
 - III. 新大陸におけるプロテスタントの拡大
 1. ベンジャミン・フランクリンの人生
 2. 経済ルールの転換
- おわりに～現代社会への示唆～

はじめに

二〇〇九年一〇月、政権交代に伴い、ギリシャ政府による国家財政の粉飾の事実が明らかとなった。このギリシャ危機に端を発した経済危機の連鎖はユーロ危機に発展し、経済・金融の混乱は欧州全土に拡大した。特に深刻な信用不安にさいなまれたポルトガル (Portugal)・イタリア (Italy)・アイルランド (Ireland)・ギリシャ (Greece)・スペイン (Spain) は、その頭文字を集めて「PIIGS」と称された。PIIGS諸国の財政再建はなお途上であり、(少なくともコロナ禍前までは)健全財政で知られたドイツ、^①スイスなどの格差は歴然としている。また、PIIGS諸国はいずれも産業大国とはいえないが、ドイツは自動車、電機、化学、製薬といった分野で多くの世界的企業を有する産業大国であり、スイス、オランダも小国ながら、多くのグローバル企業、大規模金融機関を擁し、国民生活も豊かとされている。^②

ところで、国家財政、経済・産業の状況とは別に、PIIGS諸国にはある共通点が認められる。キリスト教の主な宗派をカトリック、プロテスタント、ギリシャ正教とするならば、PIIGS諸国はいずれもカトリック、ギリシャ正教の信者が国民の多数派を占める国々である。一方、ドイツ、スイス、オランダ、ドバー海峡を渡り英国は、いずれもプロテスタントが優勢な国とされている。造語をもって語られるほどに、カトリックが優勢とされる国の財政や経済は芳しいとはいえない一方で、近年金融危機や経済危機に等しく晒されたとはいえ、プロテスタントが優勢な国のそれは危機的ではなく、なお健全であったことは確かである。

宗教と経済の間には何らかの関連性があるのだろうか。同じキリスト教でも、プロテスタントとカトリックでは根

底にある倫理は異なっている。カトリックでは秩序が重んじられ、社会が安定して動かないことを望む。一方、プロテスタントは社会の発展を望む。働くことに誠実であれ、毎日正しく出勤して勤勉に働くこと、他者の利益にも献身的であれ、と至ってシンプルな思想だが、それがプロテスタントの倫理を明確に表現している。人間・自然を超越する観念を説く宗教と利潤追求という人間らしい活動が動かす経済、両者の関連性を考えることは一見奇妙に見える。しかし、宗教が彼岸での救いだけでなく、現世での倫理を教えるものでもあるとすれば、宗教と経済活動との関係を考えることに特段の違和感はなからう。経済が適切に発展するには、適切な倫理が必要だからである。

ドイツの著名な社会学者・経済学者、マックス・ウェーバー（一八六四～一九二〇年）は、この問題、宗教と経済の関連性について深く考察を行った。彼は、思想と信仰が人々に与えた影響に関心を持ち、宗教が個人の富の水準を決定する重要な要因となっていることに深い疑問を抱いていた。近代の大企業における資本の所有や経営、高等・高級な労働に携わるプロテスタントの数が相対的に多く、さらに経済発展した地方で宗教改革がよく受け入れられた事実に着目した³。そして、一九〇五年に刊行した「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」(Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus)において、プロテスタントの職業観こそが、「近代資本主義の精神」を支えたと主張した。宗教と経済(彼のいう「資本主義」という、一見無縁とも見える両者の関係性を見出した書は、「社会学の金字塔」と呼ばれるようになった。

一六世紀の初め、ドイツのマルティン・ルターが行ったキリスト教宗教改革により、新たな宗派としてプロテスタント(抵抗者)は誕生した。初期のプロテスタントは、独善的でも利己的でもないばかりか、むしろ営利を敵視さえしていた。プロテスタントの中でも厳格な「カルヴェイニズム」の影響を受けて先鋭化した英国のピューリタン(清教徒)やフランスのユグノーらは、金融業者と両替商、英仏の国王や議会に庇護されて暴利を貪る独占的な豪商、投機

業者、銀行家に対し、激烈な闘争を行った。⁵ そうした新教徒の倫理が、なぜ営利を追求する「近代資本主義」にとつて有力な促進剤となったのか。ウエーバーは、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」において、その一見不可解な逆説の論理を明快に解明している。

本稿では、ウエーバーがその主著で示した成果を検討しながら、欧米社会において、「近代資本主義」がどのような営みから形成されたのか、特に宗教改革に伴うどのような精神が欧米社会における経済発展の原動力となったのか、について考えてみたい。

I. 宗教改革がもたらした職業聖化の思想

1. ルターの職業観

一六世紀に始まったキリスト教宗教改革の契機は、ローマカトリック教会がサン・ピエトロ寺院大聖堂の修繕資金を集めるために発行した贖宥状（贖宥が行われたことを示す証書）であった。⁵ 人々は、自ら犯した罪に対する罰が帳消しになるとされた贖宥状を購入することで、いつ自らの人生の幕が下りようとも、安心して天国に行けると考えた。しかし、「罪の許しが金銭で買える」という理不尽な、本来あるまじき教会の教え、その腐敗ぶりを批判し、ドイツのマルティン・ルター（一四八三〜一五四六年）は宗教改革を起こした。改革の流れはジャン・カルヴァンへと受け継がれ、さらにその思想は主に欧州北西部に普及することになった。

ウエーバーは、宗教改革後に新教徒となった人々の職業観に大きな変化が生じたのを認め、その契機となったものとして、ルターの聖書翻訳で「職業」にあてられた言葉に注目した。⁶ ルターが用いたドイツ語の「ベルーフ (Beruf)」

には、「職業」のほか、神から与えられた「召命」、「使命」という意味が含まれていた。やがてここから、プロテスタントの間には、自分が従事する世俗的な業務を神から与えられた「天職」として意識する生活態度が生まれることになった。この言葉はルターの職業観に由来していた。カトリック世界では、神の国の労働者として祈りつつ働く修道士の生活は、世俗の職業生活より上位にある、ということが一般の常識とされていた。しかし、(使徒パウロに発した)人は善行や儀式によらず信仰のみによって義とする思想を深めるにつれ、ルターはカトリックの僧侶生活を「現世の義務から逃れようとする利己的な愛の欠如の産物」と見なし、世俗の職業労働においてキリスト教徒としての義務を遂行することこそ、「隣人愛」の具体的な現われ、神に喜ばれる唯一の道であり、許容される世俗的職業は全て、神の前に同等の価値を持つと主張したのである。⁽⁸⁾

2. 「合理化」と職業聖化

教会聖職者の行為を否定したほか、ルターの宗教改革は「日常生活の聖化」の思想を世にもたらした。ウェーバーは、宗教改革後に宗教の新たな解釈が進んだ過程を、「合理化」と称している。彼がいう「合理化」とは、「人間を非合理的な衝動の力と現世及び自然への依存から引き離して計画的意思の支配に服従させ、彼の行為を普段の自己審査と倫理的意義の熟慮の下におくことを目指す」ことにより、「脱呪術化」し聖なる領域を独占する聖職者・修道士の存在を否定することである。⁽⁹⁾ この「合理化」により、聖職者が独占・専有した神の救済とそれに伴う禁欲的・倫理的な生活は、一般の信徒まで拡張(世俗化)され、信徒自身が担うことになった。⁽¹⁰⁾

それに伴い、信徒、民衆の生活は、神の救済を得るに相応しい倫理的な生活に再構築される(合理化される)必要があるとの考え方が生まれた。伝統的祭礼や儀礼など呪術的な非合理性を排除し、民衆の個々が神と向かい合い、その

救いを個々の倫理的な生活によって獲得するという考え方に修正されたのである。これは、神の救済を目指し倫理的に生きることは必ずしも要求されていなかった一般信徒が、「合理化」以降、聖職者・修道士が行った禁欲生活を要求されるようになったということである。一般信徒は、神に救済されるために自らを厳しく律し倫理的生活を要したが、それは同時に、日々内的外的な緊張を強いられる宗教的な生活を送らなければならぬことでもあった。そして、日々の宗教的・倫理的な生活において、信者が従事する生業（世俗業）が、救済・修行の手段、あるいはそれを実践する場となった。¹¹⁾

これがいわゆる「天職思想」の始まりであり、それをさらに展開したのが「職業聖化」の思想である。これにより、職業は信者の人生の目標とする価値がないと教えられるのではなく、人は労働を通じて聖なる人生を過ごすことができるという考えが生まれた。ウェーバーによれば、初期のプロテスタントイズムの担い手として、大きくカルヴァン派、敬虔派、メソジスト派、洗礼派運動から発生した諸信団（バプテスト派、クエーカー派など）が存在したが、¹²⁾ それらの信者は近代の経済発展に巧みに対応した。特にカルヴァン派やその流れをくむピューリタンの人々は職業聖化の思想を強く支持し、その生活態度はひたすらに救いをもとめるが故に、ウェーバーのいう「合理化」、救いを得るための倫理的な生活が徹底して実践された。¹³⁾

II. カルヴァニズムがもたらした「近代資本主義の精神」

1. カルヴァニズム下の職業労働観

ウェーバーは、「近代資本主義」の始まりを、ルターから宗教改革の流れを受け継いだフランス人、ジャン・カル

ヴァン（一五〇九—一五六四年）に見出し¹⁴。自らの職業を「神の召命に応えるための義務」と考えるルターの天職概念は、神の絶対的權威を極限まで強調し「神のみ栄光を」と唱えるカルヴァンによって、いつそう嚴格化していった。

カルヴァン派の人々（カルヴィニスト）は、富に対してカトリックの禁欲主義者と同じような嫌悪感を示してきた。しかし、彼らの抱いた嫌悪感は、富を得ること自体に対してではなく、富による享楽や富に伴う身体的な誘惑に対して向けられたものであった。片時も休むことなく働けば、そうした誘惑を遠ざけることができる。よく働きの結果として富を得ることはむしろ望ましいこと、と理解された。

プロテスタントの中でも、スイスのジュネーブに発したカルヴィニズム、その流れをくみオランダ、英国など経済先進国の人々に受け入れられたピューリタニズムは、ルターの説いた思想や形式をはるかに上回る、厳格な生活全般にわたる規律からなる専制的支配の様相を帯びていた¹⁵。カルヴィニストは、「支配的社會層であるときにも被支配的社會層にあるときにも、また多数者の地位にあるときにも少数者の地位にあるときにも、特有な經濟合理主義への愛着を示してきた」¹⁶が、これに反シカトリック教徒はどの立場にある時でも、こうした意味での經濟的合理主義に向かうことはなかった。

そうした精神をまとった初期のプロテスタントの労働者、資本家には独特の特質が備わることになった。彼らは職業活動に熱心に打ち込み、生産性を高め結果的に非常に成功した。しかしそれは、自らの金錢欲や享樂欲を動機とするものではなく、労働によって手に入れた富を享樂のために使うことを慎重に避けた。そうした金錢欲、享樂欲なら、それまでのどのような時代、社会、地域にも存在したが、初期プロテスタントたちの内面的特質が育んだ「近代資本主義の精神」は、營利を追求すること自体を目的とする、「まったく超絶的なおおよそ非合理的なものとして立ち現れ

る欲求」であったのである。ここでは、営利は、人間が物質的生活の要求を充たすための手段とは考えられていなかった。¹⁷「明白に資本主義の無条件の基調」であり、「それがたたえる雰囲気は一定の宗教的観念と密接な関連を示す」ものだった。¹⁸

こうして労働は神聖な性質を帯びるようになり、労働によって宗教的な情熱の証が立てられるなら、労働は救いとなり得るとの意識が広がった。カルヴィニズムは、労働に宗教的性格を与えた最初のキリスト教倫理となり、労働を「神の召命」と呼ぶことによつて、中世の人々の労働意欲を途方もなく増大させたのであった。

また、カトリック世界では常に職業活動と金儲けに対する一定の罪悪感が存在したが、カルヴァン派、ピューリタンは、そのやましさに縛られることはなかった。カルヴァンは、例えば、富める資本家の存在を神学的に肯定した。¹⁹カトリックの世界では神学的に疑問視されてきたもの（金銭を稼ぎ、富むこと、富者と貧者に格差が生まれること等）が、新たな教義により肯定され、従来禁止あるいは貶められていた職業や慣習が、神学的な裏付けを得ることになった。カルヴァンは、金融もカトリックが禁止していた利子も、「全ては神の賜物」と解釈する道を開いたのであった。²⁰カルヴァンの教えが一般化することで、この考えはさらに世俗化し、市民社会を支える理論として活用された。²¹特定の職業に善悪があるというのではなく、全ての仕事は善なるものである、という考え方が普及した。その人の生き方を神に召命されたものが、各々の職業であると解釈されたのである。²²

商工業者のうち、カルヴァンの教えから福音を与えられたのが、一六世紀に台頭が著しかった金融業者である。一五世紀末のクリストファー・コロンブスによる新大陸発見以来、欧州諸国によるアメリカ大陸の植民地化が進んだが、一六世紀にかけ、特にスペインやポルトガルが中南米から大量の金、銀を略奪する形で欧州にもたらした。この略奪の数世紀の間に、富の形態は領土から貴金属や貨幣など金融資産に移行した。国王や貴族が独占する領土とは違い、

個人が共有できる富が一般化するに従い、貨幣経済が著しく発達し、商業、特に金融業が急速に台頭することになった。

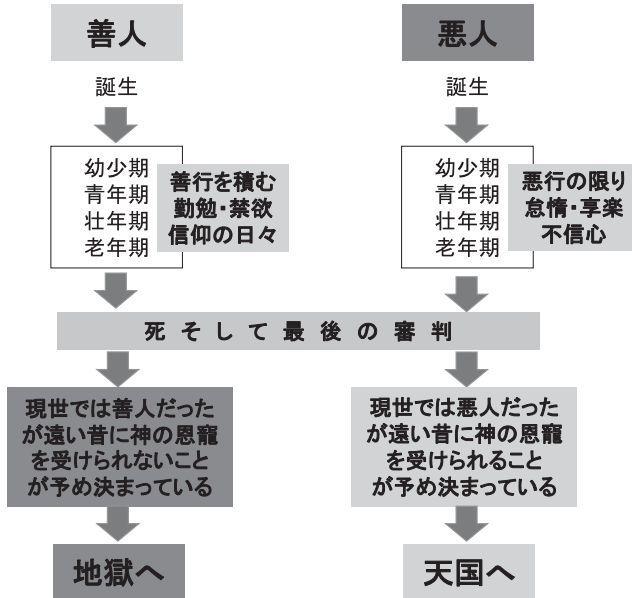
カトリック世界では、金融業者は金貸し、高利貸しと蔑まれてきたが、彼らは事業の拡大に伴い、生活の豊かさだけでなく社会的な地位や宗教的地位も欲するようになった。金融業者は、経済力を背景に新興のブルジョワ階級を形成するようになった。その新興階級の多くはプロテスタント、特にカルヴァン派を中心とする改革派のキリスト教徒で占められるようになった。新興階級は、信頼と信用に足るといふ評判を獲得し、職業活動において人の役に立とうとする熱意で知られるようになった。激しい信仰心が高度の実業的な感覚と結びついたことが、莫大な富を築く基盤となったのである。²³⁾

2. カルヴァンの予定説

厳格な性格のカルヴァンは、教会の教えに頼らず、聖書を中心に据えた教えを説いた。そのうち重要な部分を占めるのが「予定説」である(図表1)。それは、神の救いは信仰の深さや日々の善行によって左右されると説いたカトリックとは異なる教えだった。同じプロテスタントのルター派と比較しても、カルヴィニズムが「近代資本主義」を主として担うことになったのは、予定説が歴史的な影響力を持ったからである。²⁴⁾

予定説によれば、人間の救済、つまり最後の審判の後、誰が天国に行くか、地獄に行くかは、我々が生まれるはるか昔、神が永遠の予定として決めてしまっている。人間はどんなに努力しても、その予定を変えることなどできない。また、誰が救われ誰がそうでないかを知る手段もない。この考え方は、神の絶対性を主張するものであり、人間主導の救済論とは異なるものである。神の絶対性と人間の業の必要性を結び付けるため、「救われている者は、その兆候

図表1 カルヴァンの予定説



(出所) 筆者作成

が必ず現れる」又は「あたかも神に救われている者のごとくに行動する」として、そのようにできることが、実質的に救われたことを示すのだ、という論理を用いた。これは、神の絶対性を保障しつつ、かつ民衆の倫理的な行動を保障するという画期的な理論であった。また、その戒律が厳格であればあるほど、それを実践する者に神に救済されるという確信を生み出すものであった。これこそが、ウェーバーのいう「近代資本主義」を支えた「禁欲プロテスタントの倫理」であり、「近代資本主義」思想の神髄をなすプロセスの一つなのである。²⁶⁾

3. 人々の内面的孤立化と天職概念

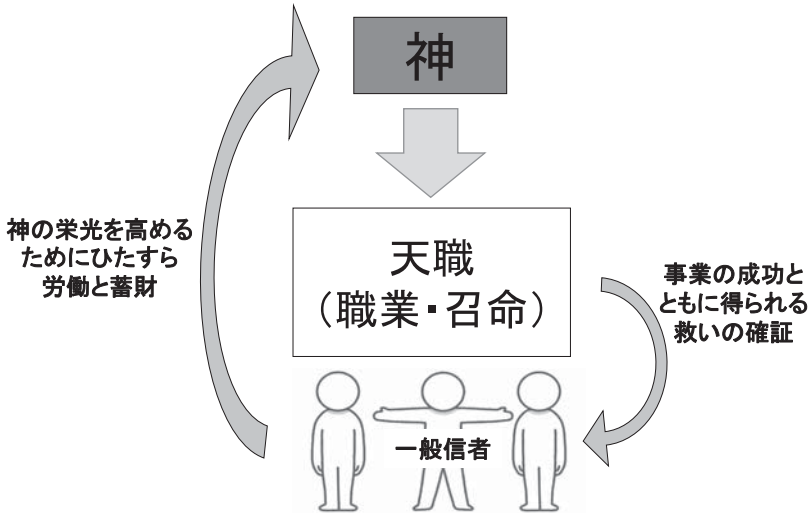
予定説の影響は、人々にかつてないほどの「内面的孤立化」²⁶⁾の感情を引き起こしたことだった。神の恩寵を受け選ばれた者だけが救われるということである以上、何人も、教会さえも人を救うこ

とはできない。ウェーバーによれば、「一切の被創造物は神から完全に隔絶し無価値であるとの峻厳な教説」と結びつき生まれた「内部的孤立化」の思想は、「ピュウリタニズムの歴史をもつ諸国民の『国民性』と制度の中に生きているあの現実的で悲観的な色彩をおびた個人主義の一つの根基を形作っている」。それではその種の個人主義は、いかにプロテスタントの社会組織における優秀性へと化したのだろうか。これは、カルヴァンが唱えた「神にのみ栄光を」に含意される神中心の教義と関連している。選ばれた信者に与えられている召命は、現世において各々の能力に応じ神の誠めを実行することで神の栄光を増すことにほかならない。²⁷⁾

カルヴァンは、自らを神の「武器」だと見なし救われることに確信を持っていたが、人知をはるかに超えた唯一絶対の存在として畏れ敬う神を信じた清教徒たちの胸中には、果たして自分は神の恩寵を受け、救いの対象に選ばれているのだろうかという疑問が、絶えず恐ろしい戦慄を伴って去来していたに違いない。²⁸⁾ 自分は選ばれ救われる人間なのか、その答えは「神のみぞ知る」のである。絶え間ない不安にさいなまれた人々は、日々何に救いを求めるのか。それに対しては、信者の苦悩を和らげるための方法が用意されていた。²⁹⁾ 一つは、誰もが自分が選ばれた人間であることを確信し、「全ての疑惑は『悪魔の誘惑』として斥けるよう義務付けること」である。もう一つの方法として用いられたのが「天職」であり、自己確信を得るための最上策として、「絶えまない職業労働を厳しく教え込むこと」である。自らの仕事を神から与えられた使命であるとし、天職での成功こそ神から選ばれた可能性を示す唯一の道と考えた（図表2）。

神からの救いを手に入れる手段として、人々は休みなく働くことが教え込まれた。この職業労働だけが、死後の不安を追い払い神の恩寵を与えられ救われているとの確信を得られる方法とされた。労働の意欲に欠けているということは、神の恩寵が失われていることを示している。また、財産を持つ人であっても、働かずに食べてはならない。全

図表2 天職の概念



神の意図になかった労働をしているか確証がほしい
(天職で成功すれば自分は天国に行けると確信できる)

(出所) 筆者作成

超越的な神を戴いたからこそその厳格な職業倫理が、そこにはあったのである。

4. カルヴァン派の宗教認識の独自性

次に、カルヴァン派やピューリタンといった改革派の宗教的感覚が持つ独自性について触れておく。ルター派の信仰が「最高の宗教的体験」として追求したのは、神自身との「神秘的合一」だった。ウエーバーによれば、それは、「実体的な神感情、つまり信仰者の靈魂に神性が入り込むという感覚」であり、「神における憩いへの渴望の充足を求める受動的な性格と純粹に感情的な内面性を特徴とするもの」である。ただし、こうした「神秘的傾向を持つ宗教意識」は、現世に対する態度という点において、「外面的な活動の積極的評価に欠けている」とウエーバーは指摘する。「神秘的合一」は「原罪による人間の無価値という深い感情」と結びつき、これが罪の許しを得るのに必要

な謙遜と単純さを維持するのであり、ルター派信徒の「毎日の悔い改め」を注意深く育むものとされた。また、これと同じ時代に、フランスの哲学者ブレイズ・パスカルのように、労働などこの世の一切の営みを自らの道徳的無価値のごまかしのための「慰戯」であると考えた人々もいた。³¹ ウェーバーはそうした考え方を「静寂主義的な隠匿」と呼んだが、カルヴァン派など改革派の宗教意識からすれば、ルター派の情感的な信仰やパスカルら「ジャンセニスト」の隠遁的な態度は激しく批判されるべきものだった、と指摘している。

ルター派の信仰に対し、カルヴァン派では、「神的なものが人間の靈魂の中に現実に入りこむというようなことは、全被造物に対する神の絶対的超越性からしてありうべからざる事」とされた。すなわち、「有限は無限を包容しえず」であつて、神とその恩恵を受けた信徒との間の交わりは、「神が彼ら（信徒）のうちに働き、それが彼らの意識にのぼる」、つまり「彼らの行為が神の恩恵の働きによる信仰から生まれ、さらにその行為の正しさよつて信仰がまた神の働きであることが証し（証明）される」ということである。また、この「信仰による義認」という中心的教義が培った宗教的感覚によつて、改革派信徒はジャンセニストの隠遁主義に陥ることもなかった。³² ウェーバーは、このような対比においては、「実践的な宗教意識を分類する際に一般に通用するような、救いの究極状態における根本的な差が明確に表れる」と述べている。³³ つまり、現世において、「救いの表象」としては不可欠ではあるものの、ルター的な信仰で求められる善行を重ねても、それによつて神の救いに与かることにはならない、あるいは救いの手段としては不適當である。それは、カルヴァニストのように救いのある代償の下に贖い取るのではなく、救いを受けられるか否かという不安を除くための技術的手段ということではかない。³⁴

カルヴィニズムの下、人々が救いに与かるために求められたのは、「神の栄光を高める」ための倫理的で勤勉な労働であつた。そこでは、かつてルターが説いたような、自らの罪を悔い改めてひたすら神を信仰する謙虚な罪人（義

人」としてあるのではなく、職業についてもルター派がいうような、それに順応して大人しく従うべき受動的な摂理によるものではなく、³⁵⁾ 神の栄光を高めるためにたゆむことなく働くことが、個々人の能動性を促す積極的な命令に変わったのであった。³⁶⁾ この命令によって、勤勉なカルヴァン派信者、鋼鉄のような信念を持つピューリタン商人、自己革新に満ちた数々の聖徒が経済の世界に続々と生まれ育った。

このようなルター派とカルヴァン派の職業観念の相違、それによってもたらされる心理的效果は広範囲に及び、世のスコラ哲学も熟考した経済秩序の摂理の発展にも関わった。³⁷⁾ スコラ哲学を大成したトマス・アクィナスは、社会における分業と職業構成を、神の宇宙計画の直接的な発言とした。ルターはそこから、神に与えられた地位と境界のうちにとどまることを「個々人の宗教的義務」としたが、ウェーバーによれば、英国のプロテスタントイズム全般に多大な影響を及ぼした牧師リチャード・バクスターの説は、彼が活躍した一七世紀半ばから一〇〇年後にアダム・ミスが「国富論」で唱えた分業システムを想起させる点が少ない。³⁸⁾

5. 神の利益に適う職業選択と労働

カルヴァンの唱えた予定説は、その内容からして宿命論に至りやすい論理だったが、人々への心理的影響としては、「救いの確証」という思想と結びつくことにより、宿命論的な帰結を拒否する動機を生むことになった。³⁹⁾ カルヴァン派、ピューリタンといった改革派信徒は、宿命ではなく、自らが選択した職業によって「職務に忠実にならしめられた者」であることを、自ら証明しようとした。彼らが、世俗的な職業労働の実践において理想としたのは、人間を神の計画的意志に服させ、自らの行為を絶えず自己審査と倫理的熟慮に照らし暮らした修道士の生活だった。厳格な清教徒は、自らが救われるか否かを審査するため、自らの罪悪と誘惑と信仰の進歩とを、継続的に毎日記帳し、あるいは

は一覧表として作成した。⁽⁴⁰⁾

後期ピューリタンは、自らの行動ばかりでなく、神の行動をも審査し、生涯のあらゆる出来事のうちに神の指示を読み取ろうとした。彼らは、カルヴァン自身の教説を逸脱し、神の行う処置の理由（神がなぜこのように、あるいはどのように導き給うのか）までを知ろうとしたのである。かくて日常生活の聖化は、ほとんど事業経営の性格を帯びるようになった。⁽⁴¹⁾

カルヴァン派信者の生活信条はその者にとって道德そのものであり、その最高善は利益を追求すること、金銭を得ることであつた。後年の豊かな生活を目的とするのではなく、ただ利益の追求、金銭を稼ぐことだけを人生の目的としたのである。彼らはなぜ、金銭を得ることに執着し、それ自体を自己目的としたのか。それは、勤勉に働き得た金銭の額こそが、来世の救いを受けられることの証、その可能性を高める証であつたからである。人生を幕引きし最後の審判の後に天国に行くため、日々禁欲的に労働し金銭を得るよう努めた。まず神は、人間の社会的な営みの全てが、神の計画・目的に適っていることを望んでいる。人間の職業労働も当然に神の栄光を高めるために存在しているのである。

このような方法的精神をもつて職業の選択を行う時、より神に喜ばれる職業、有益な職業が選ばれるのは当然のことである。神に計画・目的がある以上、天職として各人に命じられた職業労働も、合理的に遂行し有益なものではないと神からの評価は受けられない。神の意思に適うようにそれが遂行されたか否かの評価基準は、その職業労働が、①神が望む道德を持って行われたか（道德性の基準）、②神の栄光を高めるために有用だったか（有益性の基準）、③それらができた証として利益を積み上げられたか（収益性の基準）の三つである。⁽⁴²⁾特に③の基準は重要であつた。カトリックは、利益を追求することが道德的にかがわしく、金銭や富は誘惑の源泉であると見なしていたが、カルヴァ

ン派信者にとつては、利益が生まれるのは神の意図に沿った労働をしているからであり、故にそれは良いこと、神に命じられていること、だったのである。

従つて、上記三つの基準の全てに適いつつ禁欲・勤勉的に職業労働に従事し、利益を積み重ねるほどに神による救いの確証が高まることになる。人間は利益を追求し利潤を増やし続ける必要がある。また、消費の抑制と禁欲という手段で、節約に勤しむ必要がある。なぜなら人間は、「神から委託された財産を管理する下僕」としての役割を全うしなければならぬからである。⁴³さらに、職業労働に没頭することは、禁欲生活を実現する最も効果的な手段でもあった。飲酒、賭け事といった富がもたらす清浄ならざる生活への誘惑から、わが身を守ることにもつながった。

一方では、人間は自分に預けられた財貨を自己の享樂のために使うべきではないと考えられた。その結果、人は多く働くが少ししか消費しないことにより、貯蓄が生じてくる。この貯蓄は常に新しい投資を追求する。倫理的な生活の下で節約され、労働によつて利益が生まれ蓄積した資本は、計画的に投資に回されることで、豊かな者はいつそう豊かになつていった。このような職業的禁欲こそが、「近代資本主義の精神」であるとウエーバーは結論付けた。⁴⁴そして、この精神が、「近代資本主義」の発展にとつて極めて核心をなす部分であつた。

6. 「勤勉が富を生む」新たな経済サイクル

カルヴェイニズムが浸透して以降、人々の伝統的な労働観は、「生きるために働く」から「死後の救いを求め」稼ぐために働く」へと大きく変わった。人々は、厳しい規律の下で消費するよりも利益を増やし蓄財することを望んだ。ありあまる富は教会へ寄付することをよしとするカトリックとは違い、富を蓄えてよいというプロテスタントの教えは、新興の商工業者たちに熱烈に歓迎された。ウエーバーが生きた時代、ドイツやスイスでは、資本家、企業経営者、

近代的な企業のスタッフは多くのプロテスタントで占められていた。

プロテスタントの人々がスイスで起こした産業の一つに時計産業がある。四〇〇年以上の伝統を持つこの産業は、一六世紀、宗教弾圧から逃れたドイツやフランスのプロテスタントの職人たちによって、農閑期の副業として広まった。⁶⁵ アルプスの山々に囲まれた閉ざされた空間で、その勤勉な働きぶりはいかんとなく発揮され、伝統産業として脈々と受け継がれてきた。厳格な倫理の下での勤勉と蓄財によって、プロテスタントは経済的繁栄を手に入れた。これに対し、カトリックが優勢の国で、際立った経済的繁栄を成し遂げた国はほとんど見られない。

プロテスタントが経済社会で始動し始めたのは、マクロ的に見れば、様々なことが起きた時代であった。新大陸アメリカが発見され貿易取引が広範囲に行われると、スペイン、ポルトガル、イタリアでは活発な交易が行われ、経済的に豊かになった人々に消費への欲望が生まれた。また、一六世紀から一八世紀にかけて、フランス、イタリア、スペインなど欧州中の移民が都市に押し寄せた。彼らの有り余る労働力は、何か新しい形で経済に組み込まれる必要があった。これこそが、カルヴァンの認めた蓄財の絶好の投資先となった。「富を蓄えたら己に使うのではなく、投資せよ」、ここでは可能な限り生産的な投資先が選ばれた。新たな技術開発など資本を増やす分野はもちろん、自分のためにお金を使うのではなく、投資によって雇用を生んだり、公共の利益のために富を還元することが、「人として正しいこと」とされた。また、富裕層となっても、投資するという役割をもって社会に貢献することが奨励された。それは、それまでと比べて斬新な考え方だった。富を持つことはやましいことではなく、むしろ誇りに思つてよいと社会の意識が変わり始めた。

勤勉から蓄財、そして投資によって富がさらに増殖する、すなわち、「勤勉が富を生む」という経済サイクルが誕生した。プロテスタントの職業倫理自体がそれを意図したわけではなかったが、それが結果的にウェーバーが見出し

た「近代資本主義」の芽生えとなった。国家の力を背景に商人が独占的に富を築く重商主義の時代がまだ明けていない中世において、勤勉が新しい職業労働の価値観として台頭したのである。

Ⅲ. 新大陸におけるプロテスタントの拡大

1. ベンジャミン・フランクリンの人生

さらにウェーバーが注目したのは、プロテスタントの勤勉性が、オランダから英国、さらに大西洋を渡り、新大陸アメリカに波及していく流れだった。近現代のアメリカ合衆国は、先進的な自由主義の象徴的な存在だったが、米社会で展開される経済活動も合衆国建国から続く精神によって支えられてきた。

アメリカ合衆国建国の原動力となったのは、英国教会の信仰と慣行に反対し、徹底した宗教改革を主張したプロテスタントの諸教派の一つ、ピューリタンであり、その一部が一六二〇年に英国から出港、米国に渡り築いた植民地プリマスが、現在の米国の起源となっている。⁴⁷「ピルグリム・ファーザーズ」は、宗教的な理想郷を求め大西洋を渡ったが、そのために資本家から莫大な負債を負うことになった。彼らは、過酷な負債の返済のために多大な労苦を重ね、それとともに一層純粋化し、負債を返済するために粉骨碎身の努力をした。勤労の重視、経済活動の徹底した義務感、米国社会の根本に組み込まれることになり、その後の米国社会の発展にとって極めて重要な位置づけを占めるようになった。

「アメリカ合衆国建国の父」といわれたベンジャミン・フランクリンは、その根源から米国の精神をまとった人物といえよう。米国の政治家にして、夙を用いた実験で雷が電気であることを証明した気象学者、物理学者としても知

図表3 ベンジャミン・フランクリンの十三徳 (Thirteen Virtues)

1. 節制：飽くほど食うなかれ。酔うまで飲むなかれ。
2. 沈黙：自他に益なきことを語るなかれ。駄弁を弄するなかれ。
3. 規律：物はすべて所を定めて置くべし。仕事はすべて時を定めてなすべし。
4. 決断：なすべきことをなさんと決心すべし。決心したることは必ず実行すべし。
5. 節約：自他に益なきことに金銭を費やすなかれ。すなわち、浪費するなかれ。
6. 勤勉：時間を空費するなかれ。つねに何か益あることに従うべし。無用の行いはすべて断つべし。
7. 誠実：詐りを用いて人を害するなかれ。心事は無邪気に公正に保つべし。口に出だすこともまた然るべし。
8. 正義：他人の利益を傷つけ、あるいは与うべきを与えずして人に損害を及ぼすべからず。
9. 中庸：極端を避くべし。たとえ不法を受け、憤りに値すと思つとも、激怒を慎むべし。
10. 清潔：身体、衣服、住居に不潔を黙認すべからず。
11. 平静：小事、日常茶飯事、または避けがたき出来事に平静を失うなかれ。
12. 純潔：性交はもっぱら健康ないし子孫のためにのみ行い、これに耽りて頭脳を鈍らせ、身体を弱め、または自他の平安ないし信用を傷つけるがごときことあるべからず。
13. 謙讓：イエスおよびソクラテスに見習うべし。

(出所) ベンジャミン・フランクリン「フランクリン自伝」松本慎一・西川正身訳 岩波文庫
1957年1月、137—138頁

られている。フランクリンは、典型的なピューリタンの家庭に生まれ育ち、印刷業経営者を経て政治家になった。一八世紀、欧州大国の重商主義政策の下、植民地アメリカは重税に喘いでいた。鬱屈した市民感情が爆発し、ついに一七七六年、アメリカ合衆国独立を宣言することになったが、フランクリンはその草案作りに参加、「建国の父」と呼ばれ、今日の米国の礎を築いた。

印刷所を経営していた二五歳の時、向学心に燃えるフランクリンは友人とともに読書クラブを立ち上げる。書物を読み漁るうちに社会への貢献を思い立ち、後に米国で初の公立図書館を設立する（これが現在のフィラデルフィア図書館の礎となった）。フランクリンが富を築ききつかけとなったのが二六歳の時、毎日徳目を掲げていたカレンダー、「貧しきリチャードの暦 (Poor Richard's Almanack)」の出版である。「時は金なり」、「天は自ら助ける者を助く」、「ちりも積もれば山とな

る」など、フランクリンが自ら考え出した格言やことわざを書いたカレンダーであったが、これが当時ベストセラーになった。

フランクリンがプロテスタントとして、自ら課していたルールがあった。節制、沈黙、勤勉、誠実、正義など一三項目に上り、「フランクリンの十三徳」と呼ばれた(図表3⁴⁸)。フランクリンは、カレンダーに毎日一つの項目を掲げ、実践していた。フランクリンには、倫理的な日々の暮らしの原則があった。

「十三徳」の第一三ヶ条目には、「謙讓、イエス及びソクラテスに見習うべし」という言葉が添えられている。なぜなら、「神は智慧の泉であるから、智慧を得るために神の助けを求めるのは当然である」と述べられており、フランクリンの信仰は、カトリックの教会を通じたものではなく、個々人が神と直接結びつく市民社会的なプロテスタントに寄った信仰であったことがわかる。だからこそ、勤勉は当然としても、他者への奉仕や材の社会還元に積極的であればならなかった。彼は他者を助けるため、病院、教育機関を設立、現在のペンシルバニア大学の前身となる大学の創設にも尽力した。財をなした後も、科学実験や慈善事業など八面六臂の活躍をした。

米国の議員時代、合衆国の独立の契機となる七年戦争(一七五六一一七六三年)が勃発する。列強との勢力争いに明け暮れる英国は、膨大な戦費を賄うため、印紙税法を導入して、植民地米国への課税を強化した。フランクリンは英国に赴き、粘り強い交渉の末に印紙税法を廃止へ追い込んだ。不当な政策を廃止し、権利を取り戻すことができるとう自信をつけた米国は、やがて反旗を翻し、アメリカ独立戦争(一七七五一一七八三年)を起こした。そして一七七六年にアメリカ合衆国は独立を宣言した。フランクリンが策定に関わった宣言文には、「全ての人間は生まれながらにして平等に作られている」とあり、生命、自由、幸福追求の権利を高らかに謳っている。

フランクリンが体現して見せた勤勉性は、欲望を満たすための手段ではなかった。むしろ倫理的な生活のルールと

蓄財を自己目的化した生き方、それこそが、時代を画する「資本主義の精神」だった。ウェーバーは、フランクリンの「精神」について、「商人的冒険心と、道徳とは無関係の個人的な気質の表明であるのに対して、フランクリンの場合には倫理的な色彩をもつ生活の原則という性格をおびている」とした上で、「(本書では)『資本主義の精神』という概念を、このような独自の意味合いで使うことにしようと思う。(中略)『資本主義』は中国にも、インドにも、バビロンにも、また古代にも中世にも存在した。しかし、そうした『資本主義』には独自のエートス(精神)が欠けていたのだ」と述べている⁵⁰⁾。単に利益を追求するのではなく、倫理的な生き方を追求しようとしたフランクリン的な精神は、そのいずれにも存在しなかった。ウェーバーが見出した「資本主義の精神」はまさに、フランクリンの生き方によって体现されていたのである。

2. 経済ルールの転換

アメリカ合衆国が独立を宣言し、自由社会への歩みを始めた一七七六年、奇しくも英国では、「経済学の父」といわれたアダム・スミスの「国富論」が出版された。「各々の自己利益の追求とその集積が、(神の)見えざる手によって社会全体の利益になる」という教義を記した書は、自由競争、自由主義経済学の源流となった。この時期、英国は繁栄を謳歌していた時代だった。欧州の七年戦争(一七五四〜一七六三年)と北米でのフレンチ・インディアン戦争(一七五五〜一七六三年)で勝利を収め、大英帝国は重商主義政策でさらに勢力拡大し、インドなど植民地を有することになった。当時英国は、軍事力を背景に欧州諸国と熾烈な競争を繰り広げ、植民地との貿易で莫大な富を得ていた。しかし、植民地を増やそうと競争し、収益を増やし、貿易黒字を目指す過程で戦争が避けられなくなる。

スミスからすれば、重商主義には限界が見え始めていた。スミスが説いたのは、グローバルな競争によって富を獲

得する欲望のあり方からの脱却だった。労働によって価値を生み、工場やマーケットなど人々の活動の場で富を増大させるべきだと説いた。それは、それまでおろそかにしていた国内での足場を固める、大胆な政策の転換だった。土地を改良し分業を進め生産性を上げる、その上で価値ある商品を自由に売買し富を得るという経済ルールへの転換を目指した。スミスの主張は産業革命が本格化する英国で支持される。重商主義から自由主義へ、経済ルールが書き換えられようとしたのが、一八世紀後半の顕著な状況だった。

アメリカ合衆国が独立・建国し、欧州では産業革命が起こり、自由主義に基づく経済システムが台頭した。それは近代において、プロテスタントたちが自らの勤勉性を存分に発揮し、経済的繁栄を追い求める格好の場となったに違いない。

おわりに（現代社会への示唆）

ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」は、宗教によって堅固に形成された人格が、富の創造に大きな役割を果たし得たことを明らかにした。特にドイツ、スイス、オランダ、英国、そしてアメリカ合衆国といった諸国において、プロテスタントの思想、それが生み出した「近代資本主義の精神」は普及し、勤勉で誠実な労働者、資本家を生み出し、それが経済発展の原動力となった。健全な経済発展は、熱に浮かされたような消費主義ではなく、資源の適切な利用による富の創造によって実現し得る。ウェーバーのいう「近代資本主義の精神」は、それを改めて思い直させる。健全な経済発展と富の創造は、人々の倫理と勤勉性によりもたらされる。そうした意味で、富を生むルールを時代の精神から読み解こうとしたウェーバーの視点は現代でも古びることはない。

一方、時代の移り変わりとともに、ウェーバーの視点の見直しも指摘できるところである。まず第一に、経済発展と倫理の関係性についてである。ルターやカルヴァンがもたらした職業聖化の思想は、奴隷や麻薬の売買など非人道的な行為、英国やオランダが東南アジアで行った大規模で組織的、そして残忍な植民地支配、スペインやポルトガルが中南米で行った金銀の略奪行為も職業行為として認めるものであった。非人道的な職業行為に宗教倫理が備わっているとは考えにくい。ひとたび倫理が欠落すれば、経済行為は経済合理性の名の下に剥き出しの欲望となって暴走しかねない。

一八世紀後半、自由放任思想をもって「生産の経済学」を説いたアダム・スミスは、自由の行き過ぎを肯定したわけではない。近年において、例えば、一九八〇年代以降、世界的な規制緩和のなか、個人、企業や金融機関による欲望の暴走が、欧米諸国や日本で経済バブルを発生させ、その崩壊と経済危機を引き起こした。経済が悪化すれば、企業による不正事件がそれに追隨して明るみになった。それは一九世紀以降顕著となった「発展一辺倒」の経済社会のあり方にこそ問題があった。多くの場合、倫理が欠如しており、現代の経済社会やその「資本主義の精神」は、本来の宗教的動機を失っていたといつてよい。

第二に、経済的価値観が変わるなか、「発展」をどう捉えるかという点である。近年の金融危機以降、経済発展を是とする価値観やそれを前提とした経済システムを見直す動きがある。例えば、企業価値と株主利益の最大化を目指す経営は、格差の拡大、環境問題への対応の遅れ、従業員の疲弊など人間社会に多くの副作用をもたらした。「発展一辺倒」の価値観の形成にプロテスタント思想が貢献したことは間違いなく、経済システムの見直しとともに、その思想自体が見直しを迫られるかもしれない。

ウェーバーがいうように、唯物主義的で「営利への衝動」が大きいプロテスタント、利益や財産の獲得よりも安定

した生活を望むカトリックと見なした時^⑤、今後の経済システムでは、いずれが好ましいとされるだろうか。ロボットやAIが人間の労働の多くを代替するようになれば、人々はより人間らしい生活を志向するかもしれない。その時人々の関心は、経済、政治、技術革新ばかりでなく、人間の精神や幸福を重視して、これまで以上に芸術、文学、宗教といった分野に移ることになるかもしれない。猪突猛進型の「働きの者」よりも、多趣味で人生を謳歌する人の方が尊敬を集めるようになるかもしれない。また、経済や財政の好不調によって国の良し悪しを測ることもなくなるのかもしれない。産業大国ではないにせよ、多くの芸術、文学、宗教遺産を擁し、人間の精神や幸福を重視するカトリックが優勢な諸国が、そうした役割をもつて国のあり方を確立することもあり得るのである。

第三に「勤勉性」の本身は変化するということである。新たなテクノロジーが進化する現代、人々の労働がコンピュータやロボットでは代替できないことを証明する必要がある。単純に勤勉性だけではなく、数学的思考やコンピュータを駆使できる能力、社会に共感して働くためのコミュニケーション能力が求められる一方で、そのいずれも使われない職業、ルーティンを繰り返す勤勉性は、デジタル社会では最も存在を脅かされる可能性がある。

無資源国ながら、持ち前の勤勉性と知識・技術力によって戦後の焦土からわが国は立ち上がり、敗戦からわずか二〇年余で米国に次ぐ経済大国にのし上がった（一九六八年に日本のGDPは世界第二位になった）。一九八〇年代まで続いた高度経済成長は、日本人の勤勉性によって支えられた。しかし現在、世界で最も豊かなはずのこの国で、過労死が問題になっているのはなぜなのか。それは、人や経済は成長しなければならぬという強迫観念にも似た考えに起因している。それは人間として果たして幸せなことなのか。人類が成長すべき分野は職業や経済だけではなく、数字で表せないものもある。芸術、友情、精神面などでもっと別の成長をすることも、人間の行為としては必要である。そうした豊かさよりも、ただ働くことが優先されるとすれば、それはやや残念なことのようにも思えるのである。

【参考文献】

〔邦文〕

- 今野元「マックス・ウェーバー 主体的人間の悲喜劇」岩波新書 二〇二〇年五月
 梅津順一「バクスターとスミスー宗教的人間と経済的人間のあいだ」『三田学会雑誌』第七四卷第二号 慶應義塾経済学会 一九八一年
 漆畑春彦「近代経済思想史における市場経済とケインズとハイエクの経済思想上の対立を軸に」『平成法政研究』第二五卷第一号 平成法政学会 二〇二〇年十一月
 大西直樹「ビルグリム・ファーザーズという神話」講談社選書 一九九八年五月
 野口雅弘「マックス・ウェーバー 近代と格闘した思想家」中公新書 二〇二〇年五月
 長部日出雄「仏教と資本主義」新潮社 二〇〇四年四月
 久米あつみ「人類の知的遺産」二八 カルヴァン」講談社 一九八〇年十一月
 深井智朗「プロテスタントイズム 宗教改革から現代政治まで」中公新書 二〇一七年三月
 保坂俊司「宗教の経済思想」光文社新書 二〇〇六年十一月

【翻訳書】

- ベンジャミン・フランクリン「フランクリン自伝」松本慎一・西川正身訳 岩波文庫、二〇一四年十二月
 D・K・マッキム「魂の養いと思索のために 「キリスト教綱要」を読む」出村彰訳 教文館 二〇一三年十一月
 マックス・ウェーバー「プロテスタントイズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳 岩波文庫 一九八九年一月
 トム・バトラール・ポートン「世界の経済学五〇の名著」大間知知子訳 デイスカヴァー・トゥエンティワン 二〇一八年一月

【注】

- (1) 二〇一五年度に歳出・歳入が均衡し財政再建を達成した。二〇一九年度は三九五億ユーロの大幅赤字となっている。
 (2) 二〇一九年の国民一人当たり名目GDP国別ランキング(IMF統計)によれば、プロテスタントが優勢とされる国の数値及び順位は、スイス・八二、四八四ドル(第二位)、米国・六五、一五四ドル(第七位)、オランダ・五二、六四六ドル(第一二位)、ドイツ・四六、四七三ドル(第一八位)、英国・四二、三七九ドル(第二二位) などとなっている。日本は四〇、二五六

ドルで第二五位。 <https://statistisches.com/economy/projected-world-gdp-capita-ranking.php> 小国ながら、スイスには、アセア・ブラウン・ボベリ (ABB、電力・重工業)、チバ (特殊化学)、グレンコア (鉱業・商社)、ネスレ (食品)、オメガ (時計、精密機器)、ロシユ (製薬) といった大企業のほか、UBS、クレディスイス、チューリヒ保険といった世界的金融機関の本社がある。オランダにも、ハイネケン (食品・飲料)、ユニリーバ (消費財製造)、アクゾノベル (化学)、フィリップス (電気機器) といった大企業のほか、ABNアムロ、INGグループといった世界的金融機関の本社がある。

(3) マックス・ウェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳 岩波文庫 一九八九年一月、二六一—二七頁 一八九五年、ドイツ帝国の領邦バーデン大公国の総人口のうち、プロテスタントは三七・〇%、カトリック信徒は六一・三%、ユダヤ人は一・五%だった。しかし、一八八五—一八九一年の小学校より上の義務教育に属さない上位学校の生徒たちの信仰種別を見ると、高等学校はプロテスタント四三%、カトリック四六%と拮抗していたが、実業高等学校は各々六九%、三一%、高等実業学校五二%、四一%であるなど、プロテスタントの数が相対的に多かった。

(4) マックス・ウェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳 岩波文庫 一九八九年一月、一一六頁

(5) わが国では、「贖宥状」というより、「免罪符」という訳語が使われることが多いが、これは正確ではない。ここで免じられるのは、罪ではなく過ちのために科せられた罰であり、贖宥状はその罰を代行したことの証書である。深井智朗「プロテスタンティズム 宗教改革から現代政治まで」中公新書 二〇一七年三月、一五一—一六頁

(6) マックス・ウェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳 岩波文庫 一九八九年一月、一〇九—一一〇頁

(7) マックス・ウェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳 岩波文庫 一九八九年一月、一一〇頁

(8) 長部日出雄「仏教と資本主義」新潮社 二〇〇四年四月、一五頁、マックス・ウェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳 岩波文庫 一九八九年一月、一一〇—一一二頁、一二二—一二三頁 ウェーバーは、「世俗の職業生活に道徳的性格を与えたことが宗教改革の、したがってとくにルッターの業績のうちで、後代への影響が最も大きかったものの一つだ」ということは、実際疑問の余地がなく、もはや常識だと言ってよい」と述べている。

(9) マックス・ウェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳 岩波文庫 一九八九年一月、五三一—六二頁

- (10) 保坂俊司「宗教の経済思想」光文社新書 二〇〇六年一月、三〇―三二頁
- (11) 保坂俊司「宗教の経済思想」光文社新書 二〇〇六年一月、三一―三二頁
- (12) マックス・ウェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳 岩波文庫 一九八九年一月、一三八頁
- (13) その思想には、①進歩の精神、②労働自体を目的とする勤勉な労働への愛着、③規律正しき、時間に対する正確さ、正直さ、④無益なつきあいや無駄なおしゃべり、睡眠、性交渉、贅沢によつて時間を浪費することへの嫌悪、⑤完全な自己抑制、そして無邪気な喜びに対する反感、⑥より大きな利益の獲得という形で表される、資源の最も生産的な利用に対する熱心さ、そして、⑦天職という概念といったものがある。トム・パトラール・ポートン「世界の経済学五〇の名著」大間知子訳 ディスカヴァー・トゥエンティワン 二〇一八年一〇月、一〇三―一〇四頁
- (14) マックス・ウェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳 岩波文庫 一九八九年一月、一二八―一二九頁
- (15) カルヴァンは、一五四一年から一四四年間、ジュネーブで市政の実権を握り、「神権政治」と呼ばれる厳格な教会及び政治改革を断行した。市民の生活を厳格な道德規範で拘束し、法律・政治を聖書に従うよう要求した。市民は徹底した禁欲生活を強いられ、違反者は厳しく処罰された。また、神権政治の反対者を捕らえ火刑に処するなど厳しい宗教統制を行った。
- (16) マックス・ウェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳 岩波文庫 一九八九年一月、二四頁
- (17) マックス・ウェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳 岩波文庫 一九八九年一月、四七―四八頁
- (18) この点について、ウェーバーは、「これはとらわれない立場から見れば、『自然の』事態を倒錯したおそ無意味なことと言えようが、また資本主義にとつては明白に無条件の基調であつて、その空気に触れない者にはちよつと理解しえないものだ。がまた、同時に、それがたたえている雰囲気は一定の宗教的観念と密接な関連を示している」と述べている。マックス・ウェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳 岩波文庫 一九八九年一月、四八頁
- (19) カルヴァンは、富める資本家の存在について次のように述べ、それを肯定している。「私のものつものはみな神の手から得たものであります。欠乏や貧困のあるところでは、私は助けを必要とする人々を私の能うかぎり助けなければなりません。(中略)そして神が私たちに与えた賜物すべてにおいて崇められるようにと、私たちが願うなら、私たちがはこの規則を用いなければなりません。(中略)すなわち、だれも離れていることのないようにし、神が富む者も貧しい者もともにいるようにして、

- 善を行う機会を与えたことを知るのであります〔共観福音書説教「マタイによる福音書三章一〇節」〕。久米あつみ「人類の知的遺産二八 カルヴァン」講談社 一九八〇年一月、四〇―四一頁
- (20) カルヴァンは、「教会の」各員は賜物と必要性の度合いに応じてたがいに交流する。この相互協力はきわめてよくつり合いのとれたものであり、美しい調和を保っている。ある者たちはより多く所有し、ある者たちはより少なく所有し、賜物は不平等に分配されているけれども〔コリント人への第二の手紙註解「八章一四節」〕と述べている。各人に与えられている賜物は不平等であるが、しかしかけがえのない価値をもっているという認識から、どのような職業も神の召命としての意義を持つものとして尊重される。久米あつみ「人類の知的遺産二八 カルヴァン」講談社 一九八〇年一月、四一頁
- (21) 保坂俊司「宗教の経済思想」光文社新書 二〇〇六年一月、三三―三五頁
- (22) 「召命とは呼びかけという意味でもある。この呼びかけとは、神が指でさし示して各人にこういうことである。『あなたはかくかくのように生きなさい』と。これが私たちの「身分」と呼んでいるものである。〔共観福音書説教「マタイによる福音書三章一―二節」久米あつみ「人類の知的遺産二八 カルヴァン」講談社 一九八〇年一月、四二頁
- (23) 保坂俊司「宗教の経済思想」光文社新書 二〇〇六年一月、二五―二七頁
- (24) マックス・ウェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳 岩波文庫 一九八九年一月、一五一―一五二頁
- (25) 保坂俊司「宗教の経済思想」光文社新書 二〇〇六年一月、三五頁
- (26) ウェーバーは、「内面的孤立化」について、「(このこと、すなわち)教会や聖礼典による救済を完全に廃棄したということ(ルタートウムではこれはまだ徹底されていない)こそが、カトリシズムと比較して、無条件に異なる決定的な点だ。世界を呪術から解放するという宗教史上のあの偉大な過程、すなわち、古代ユダヤの預言者とともににはじまり、ギリシャの科学的思考と結合しつつ、救いのためのあらゆる呪術的方法を迷信とし邪悪として排斥したあの呪術からの解放の過程は、ここに完結をみたのだった。真のビュウリタンは埋葬にさいしても一切の宗教的儀式を排し、歌も音楽もなしに近親者を葬ったが、これはいかなる『迷信』をも、つまり呪術的聖典礼的なのが何らかの救いをもたらしようというような信頼の心を、生ぜしめなためだった。神が拒否しようとして定め給うた者に神の恩恵を与えようような呪術的な方法など存在しないばかりか、およそどんな方法も存在しない」と説明している。マックス・ウェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳 岩波文庫 一九八九年一月、一五七頁
- (27) 久米あつみ「人類の知的遺産二八 カルヴァン」講談社 一九八〇年一月、四〇―四一頁

- (28) マックス・ウェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳 一九八九年一月、一七三頁
- (29) マックス・ウェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳 岩波文庫 一九八九年一月、一七八—一七九頁
- (30) マックス・ウェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳 岩波文庫 一九八九年一月、一八二—一八三頁
- (31) 久米あつみ「人類の知的遺産二八 カルヴァン」講談社 一九八〇年十一月、四〇五頁。パスカルをはじめ「ジャンセニスト」たちは、予定の信仰を持っていたが、彼らの場合は全被造物を無価値な、むなしいものと見るところから、むしろ現世を断念し黙想に励むべきと考えた。
- (32) 久米あつみ「人類の知的遺産二八 カルヴァン」講談社 一九八〇年十一月、四〇七頁、長部日出雄「仏教と資本主義」新潮社 二〇〇四年四月、四〇五頁
- (33) マックス・ウェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳 岩波文庫 一九八九年一月、一八三頁。その理由として、ウェーバーは次のように続けている。「宗教的達人が自分の救われていることを確信しうるかたちは、自分を神の力の容器と感ずるか、あるいはその道具と感ずるか、その何れかである。前者のばあいには彼の宗教生活は神秘的な感情の培養に傾き、後者のばあいには禁欲的な行為に傾く。ルッターは第一の類型により近かつたし、カルヴィニズムは第二の類型に属していた。改革派の信徒もまた『信仰のみ』によって救われようと欲した。しかし、すでにカルヴァンの意見によっても、すべて単なる感情や気分はどんなに崇高にみえても欺瞞的なものであり、したがって信仰は『救いの確かさ』の確実な基礎として役立ちうるには、客観的な働きによって確証されねばならない。つまり、信仰は『有効な信仰』でなければならぬし、救いへの召命は『有効な召命』でなければならぬ。もし進んで改革派の信徒に、それではどのような成果によって真の信仰を確実に識別できるのかと問うなら、その答えはこうだろう。それは神の栄光を増すために役立つようなキリスト者の生きざまだ、と」。
- (34) 久米あつみ「人類の知的遺産二八 カルヴァン」講談社 一九八〇年十一月、四〇七頁
- (35) ウェーバーは、「ルッターの場合、天職概念は結局伝統主義を脱するにいたらなかった。世俗的職業なるものは神の導きとして人が甘受し、これに『順応する』ものであって、こうした色調のかげにかくれて、職業労働は（天職として）神から与えられた使命、否むしろ使命そのものだとする彼のいま一つの思想は色あせてしまった」と述べている。マックス・ウェーバー

- 「プロテスタントイイズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳 岩波文庫 一九八九年一月、一二五頁
- (36) 長部日出雄「仏教と資本主義」新潮社 二〇〇四年四月、二四頁
- (37) マックス・ウェーバー「プロテスタントイイズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳 岩波文庫 一九八九年一月、三〇五―三〇六頁、長部日出雄「仏教と資本主義」新潮社 二〇〇四年四月、二四―二五頁
- (38) マックス・ウェーバー「プロテスタントイイズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳 岩波文庫 一九八九年一月、三〇七―三〇八頁
- (39) 久米あつみ「人類の知的遺産二八 カルヴァン」講談社 一九八〇年一月、四〇七頁、長部日出雄「仏教と資本主義」新潮社 二〇〇四年四月、四〇七頁
- (40) 長部日出雄「仏教と資本主義」新潮社 二〇〇四年四月、一九―二〇頁、ベンジャミン・フランクリン「フランクリン自伝」松本慎一・西川正身訳 岩波文庫、二〇一四年二月、一三九―一四一頁。後述するベンジャミン・フランクリンが自らの一つ一つの徳性における進歩について、統計的な表示の形で行った記帳も、その典型的な一例といえる。
- (41) 久米あつみ「人類の知的遺産二八 カルヴァン」講談社 一九八〇年一月、四〇七頁、長部日出雄「仏教と資本主義」新潮社 二〇〇四年四月、二〇―二二頁
- (42) 久米あつみ「人類の知的遺産二八 カルヴァン」講談社 一九八〇年一月、四〇八頁
- (43) マックス・ウェーバー「プロテスタントイイズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳 岩波文庫 一九八九年一月、三三九頁 ウェーバーは、「人間は神の恩寵によって与えられた財貨の管理者にすぎず、聖書の譬話にある僕のように、一デナリにいたるまで委託された貨幣の報告をしなければならず、その一部を、神の栄光のためでなく、自分の享楽のために支出するなどといったことは、少なくとも危険なことがらなのだ」と述べている。
- (44) マックス・ウェーバー「プロテスタントイイズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳 岩波文庫 一九八九年一月、三三九―三四三頁
- (45) 一六世紀、フランスでのカルヴァン支持者はユグノーと呼ばれた。ユグノーはフランスで宗教的迫害を受けていたため、やがて各国へ亡命していく。スイスへ亡命したユグノーには手工業者が多く、時計製造技術を持つものもいた。一方スイスでは、カルヴァンの改革により贅沢品が規制されたため、宝飾細工職人が仕事を探していた。そこで、ユグノーと地元宝飾細工職人の協業が始まった。
- (46) その起源は、一六世紀英国におけるメアリー女王によるカトリックの復興政策と徹底したプロテスタントの弾圧から逃れた

人々が、ジュネーブのカルヴァン神学校に学び、その後エリザベス一世（一五三三〜一六〇三年）の時代に帰国して始めた地下活動にあった。彼らは、英国教会の改革を目指し、当時非合法とされた信仰を基礎に強靱な信仰を形成してきた。保坂俊司「宗教の経済思想」光文社新書 二〇〇六年一月、三九頁

(47)

大西直樹氏の「ビルグリム・ファーザーズという神話」（講談社選書）には、米国の精神の根源ともいうべき次の一節が紹介されている。「一七世紀初頭のイギリスでの宗教弾圧を逃れ、信仰の自由を求めた宗教的な一団がイギリスのプリマスを出発し、(中略)文字通り信仰に命をかけたビルグリムの人びと。ルネッサンスはなやかなヨーロッパ文明を捨て、あえてアメリカの荒野を選んだ我らの父祖。ここに、キリスト教国としてのアメリカの信仰の起源がある。また、メイフラワー・コンバクトは、近代社会を形成する市民契約の原型である。(中略)アメリカが覇権国家として超大国化すればするほど、起源としてのプリマスへの思いは深まっていく。退廃、欲望、贅沢、悪意や妬みなどから自由な、純粹な営みの再出発、あたかも楽園における墮落前のアダムとイヴのように、健気で、つつましい原初的な再出発がそこでなされたかのように」。大西直樹「ビルグリム・ファーザーズという神話」講談社選書 一九九八年五月、九一〜一〇頁

(48)

ベンジャミン・フランクリン「フランクリン自伝」松本慎一・西川正身訳 岩波文庫 一九五七年一月、一三七〜一三八頁

(49)

保坂俊司「宗教の経済思想」光文社新書 二〇〇六年一月、四三〜四四頁

(50)

マックス・ウェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳 岩波文庫 一九八九年一月、四四〜四五頁

(51)

この点に関し、ウェーバーは次のように述べている。「プロテスタンティズムを奉ずる人々はカトリック的生活態度の禁欲的理想を批判しようとするし、カトリック信徒の方はこれに答えて、『唯物主義』をプロテスタンティズムがもたらした生活内容全体の世俗化の結果だと非難する。現代のある学者も、営利生活に対する両派の信者の態度に見られるこのような対立は次のように定式化すべきだと考えた。『カトリック信徒はもの静かで、営利への衝動が少ないために、危険と刺激に充ちていても、場合によっては名誉と財産を獲得しうる、というような生涯よりは、たとい所得はずっと僅少でも、できるかぎり安定した生活の方を大切にす。うまいものを食わないのなら寝て暮らせというざれ言葉がある。そうした場合、プロテスタントは進んでうまいものを食おうとするのに、カトリック信徒は寝て暮らせようとするのだ』と。マックス・ウェーバー「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」大塚久雄訳 岩波文庫 一九八九年一月、二七頁